

時空間の旅人 (吉村拓也編)

輝

プロローグ

大富豪・吉村拓也は豊富な資金で携帯型タイムマシンを完成させた。

今流行のタッチパネル式の携帯電話のようなもので、首からぶら下げるストラップ付きだ。

研究室は、さながら図書館のように広く、書物が整然と棚に収められている。テーブルも広くて…工具や材料が豊富に揃っていた。

拓也は、歴史が三度の飯より大好きと来ている。合わせて…身を隠すための物体透明化機能も発明し盛り込んだ。

ワンタッチで、タイムスリップできるし、姿を隠せるのだ。

そして、身を守るための特殊繊維で編んだボディースーツを着込んでいる。

もう、ちょっとした実験は済んだ。拓也は得意の絶頂であった。

飛ぶ目的時間も決め、その時代に見合った着物も準備してある。

ただ、拓也は頭でっかち、運動が大の苦手ときている。

そんな軟弱な拓也…自分でも不安に思ったのか…ここ1ヶ月、ジムに通いある程度、筋力は付いたのだが…

1

最初から、姿を隠して飛ぶ。

目的時間は、1703年1月29日（元禄15年12月13日）

グイ〜〜ンと言う一瞬の浮遊感。間髪を入れず、あたりが明るくなってきた瞬間、側をものすごいスピードで走り抜けるものに出くわした。

棒状の先っぽが、拓也の頭部を掠めていく…（コ〜〜〜ンッ）

拓也は「イテッ」と呻いて、うずくまる。

50m位先で馬が止まった。

馬上の侍は、振り返って見ている。

拓也は声を出しては拙いと、痛みを堪えている。

馬に乗った侍は、首を傾げながら走り去って行ってしまった。

拓也『イテ〜〜〜、アッ、たん瘤が出来ている…そっか〜侍が持っている脇差しの鞘に当たったんだ〜〜でも…よかった〜〜まともにぶつからなくて〜〜』

側には、お地蔵さんが笑顔を見せていた。

拓也『よし、目標もつかめた。あとは隅田川に出て南下すれば本所に出る…距離として10km…半日も歩けば着くだろう…』その思いは挫折した。

半分も歩かず、疲れが出てきた…

拓也『体力ねーな～～…あそこで一休みしよう…』

近くの畑には、農夫が作業している。

継ぎ接ぎだらけの着物…髷は結っているが…あらぬ方向を向いているし、剃った後の頭には無駄毛が伸びてきていて、むさくるしい…そんな姿を見た拓也は『昔は…みんなこうだったのだろうか…貧困この上ない…』とっていると…農夫が突然…ブーツと放屁した。

拓也は、危うく『ウェッ!』と声を出すところだった。

拓也は、そそくさとその場を離れる。農夫は、気配を感じたのだろう…こちらを見ている…

しかし拓也の姿は見えないが…ヒタヒタと足音を聞き取ったのだろう「ひえ～～」と言って農夫が腰を抜かす。

「ゆ…幽霊だ～～」と這って逃げようとしていた…

拓也『あっ、そうか～～姿が見えず足音だけが聞こえる…無理もない…ごめんよ、おっさん…』

2

拓也『寒びーな～～12月だからな～護身用ボディースーツ着ていて良かった～。しかし…見渡す限り人っ子一人いない…』所々、雑木林がある、そこには寺院の建物があるらしい。

またポツンポツンと民家が伺える。

拓也『都会に慣れた私には、ちょっと…寂しいな～～』

そんなことを思っていると、後ろから軽快な足音が聞こえてくる。

タッタッタッタと。

左肩に何か担いでいる。立ち止まって見ていると、飛脚であった。尻端折りと草鞋…格好は寒そうだが…走っているから平気なのだろう。

拓也は、ボケーッと突っ立っていたものだから、危なく衝突するところであった。

そう…こちらの姿は見えないのである。

こちらから除けてあげないと…

しかし、飛脚は健脚なのだろう、ものすごいスピードだ。

マラソン選手とどちらが速いだろうと、つまらぬことを思ってしまった。

すっかり暗くなった頃、拓也は本所とおぼしき街並みに着いた。

大きな屋敷が建ち並ぶ…

遠くで犬の吠える声も聞こえてくる。

時代劇を見ているのではと錯覚するほど、情景は似ていた。

拓也は、ハタと困った…目的は吉良邸討ち入りを見ること。史実どおりなのか否か…

それが起こるのは明日14日の夜だ。

ねぐらを確保しなければ。

拓也『そうだ、先ほど本所の街に入る前、廃屋があった…そこに泊まろう…携帯食を持ってきたが…金を用意してきていない…』

廃屋の中で、透明化機能のスイッチをOffにした。

拓也「凄い埃だな～横になれる場所はあるだろうか？」と独り言を言いながら廃屋を探検する。

拓也は、冷たい携帯食を食べながら『約1日分のカロリー摂取と脳神経に働きかける栄養入りだから…1日食事をしなくてもすむ…便利なんだけど…暖かいものが食べたいな～』と思った。

そして、かび臭い匂いを我慢しながら、眠りに入る。

夜中何度も目が覚めた…

こんな環境で、眠れるほど拓也は図太くない。

ネズミの走り回る音や、家がきしむ音で目が覚める。

ひどく疲れて朝を迎えた。

拓也「さあーて、夜まで何をしよう…」姿が透明なままだと、気を遣うし…肝心の討ち入り時だけ透明になろうと決め、そのままの姿で本所の街に向かった。

ちゃんと、髷ではなく長い髪を後ろで縛った髪型だから変に写らないだろうし…着物に袴、草鞋も用意してきた。

ただ、刀は準備できなかつたので丸腰だ。

刀を持っていない方がトラブルに巻き込まれなくて済むだろうという配慮もあつたのである。

3

本所の街は、賑わっていた。皆、いそいそと早足で歩いている。

拓也は何故だろうと考えてみた。

そう…12月…師走だからだと思いあつた。

何かの書物で見た記憶がある、平安時代から言い伝えられていて、色々な語源があつたようだ。現代でも師走は忙しいという風潮は残っている。

突然、男がぶつかってきた。

男「おう～何をボサーッと突っ立っているんだい、気をつけな！！」と言い捨て、足早に去っていった…

拓也は「すまん！」と詫びたが、聞こえたかどうか…それほど急ぎ足で去っていく男。

拓也は、ハッと気付く。

懐に、隠ばせていたタイムマシンが無くなつていたのである。

拓也「ドロボー！」と叫び、追い掛けたが男を見失ってしまった。

拓也『ヤバイッ、マシンが無くては…元に戻ることも出来ない…早く見つけなければ…それより…使われたら大変なことになる…』

あちこち走り回る拓也…疲れ果て地面に座り込む…

拓也『おちつけ…おちつけ…マシーンには触れた時のため、誤作動防止のロックが働いている…解除するにはパスワードが必要だ…使われることは無いだろう…』

男『へへへ…適度な重さがある…この巾着袋の中に10両くらい入っているかな?』

男『ん?何じゃこりゃ〜』堅い材質で出来た、印籠のようなもの…

男『けっ、空ける所もねえ〜』と興味を無くし、何を思ったか川に向かって投げ捨てた。

弧を描いて、飛んでいく物を、脇から人影が現れジャンプし掴んだ。

男「なんでえ〜〜!」見ると、旅姿をした若い女であった。

男「おい!味なまねをしてくれるじゃねーかー」

女「おや?捨てたんじゃないのかい?…貰っておくよ」

男「その身のこなし…ただもんじゃねえな!」

女「ふふっ…失せな、泥棒猫!」

男「なに〜〜〜っ」と言い跳びかかっていく。

しかし、その女は軽い身のこなしで飛び退く。

拓也は、途方に暮れていた。

項垂れていると、目の前に人が立って、マシーンを差し出している。

拓也「ハッ…」

女「取り返して来てあげたよ。」

拓也「あ・ありがとう…」

拓也は相手をまじまじと見た。

若い綺麗な娘であった。

女「一部始終見ていました…あなたは隙だらけで…危なっかしいなーと…ふふっ」

拓也「大切な物なので、何とお礼を言ったら…」

女「お礼なんていらないわ。」

拓也「あっ…私は拓一郎と申す。あなたは?」

女「沙耶…気をつけて行ってね。」と言い残し去っていった。

拓也『沙耶さんか〜〜いい名だな〜』なんか、胸の中が熱くなった。拓也は、研究ばかりしていたので異性と出逢うと言うことが少なかったのである。

姿が見えないのだから…なにも物陰に隠れる必要はないのだが…

そして、拓也は気づいていないのだが、もう一人黒装束に身を固めた人物が物陰から吉良邸の様子を窺っていた。

底冷えのする夜であった。

拓也は、その寒さと緊張で震えが止まらない…

暫くすると…一人、また一人と段々と人数が増え始めていた。

中には、竹で出来たハシゴを担いでいる者も居る。

先頭には、微動だにせず仁王立ちをした侍が…大石良雄と思われる。

無言で、手を振る…

約半数くらいの赤穂浪士が裏手に移動し始めた。

疎らな足音だけが、微かに聞こえた。

息をのんで見つめている拓也は、微かな甘い香りに気付く『この香りは…沙耶さん…』

拓也の数メートル後ろの物陰にいる人物に気付いた。

黒装束なので目だけしか見えないのだが…確かに沙耶さんのよう…

拓也『なんで…沙耶さんがここに？』

ジッと吉良邸を見つめていた。声をかけようにも…こちらは透明だし…この状況では危険だ。

突然「わ～～～っ」という、大声と共に門から雪崩れ込んでいく赤穂浪士。堀には、ハシゴが掛かっている…あそこから進入し、門のかんぬぎを開けたと想像が出来る。

怒号など騒乱が始まっている…

門を介して内部が見える位置まで、移動してみる…

それを見た瞬間、拓也は後悔した。

地獄絵と化していたのである…

血まみれの腕が飛んできたり…首までもゴロゴロと…

拓也は、吐いた…とても正視できず、後ずさりする。

それが、現実というもの。想像を遙かに超える悲惨さなのである…

どの位たった頃だろう…大石良雄が生首を持って出てきた。

他の赤穂浪士もバラバラと出てくる…みな目が血走っていて凄い形相だ。

ふと、黒装束の沙耶を見ると…『あっ危ない！！』

大石良雄を見ていた沙耶の、後方から刀を上段に振りあげた浪士が…

拓也は思わず叫んでいた「沙耶さん！！後ろ～～～！！」

拓也は見た。

沙耶が、前へ回転レシーブし避けると共に自分の背丈ほどある堀を乗り越え消えたのである。

斬りつけた浪士は、声のした拓也の方に振り向いてキョロキョロしている。

拓也は拓也で…そろそろと位置を移動した。拓也『ヤバイ…この場を離れないと…』

街外れの廃屋に、拓也は戻ってきた。

透明スイッチをOffにする。

瞬間、奥でカタッと物音がした。

拓也「誰？」と言って、恐る恐る奥へ入って行くと…

黒装束の沙耶がうずくまっていた。

拓也「沙耶さん！！」

沙耶「はっ、拓一郎殿…先ほどは…かたじけない…いい隠れ場所だったので…」

拓也「それより、沙耶さん…どうしました？」黒装束の背中部分が切れていて…血が流れていた。

沙耶「だ・大丈夫です…かすり傷です…」

拓也「大丈夫って…こんなに血が出てる…」

拓也は、マシンを入れたケースに数枚の傷バンがあることを思い出した。

この小さな傷バンは、自分のいた時代の優れもので、どんな大きな傷にも対応する伸縮自在な物である。

沙耶の傷は、15cm位…深さはない。

伸ばせば、収縮による止血も期待できる。

拓也「さあ…着物脱いで、傷バンを貼ってあげるから。」

沙耶は「そんな…」とモジモジしている…

拓也「あっ、そうか～～ごめん…」

着物の裂けている部分を大きくして、傷バンを貼ってあげた。

沙耶「拓一郎殿。」

拓也「殿でなく、さん付けで言って下さい、私も沙耶さんと言いますので…」

沙耶「では…拓一郎さん…かたじけない…」

拓也「いや、私も大切な物を取り返して頂いた。お礼です（笑）」

沙耶「でも…あの時…拓一郎さんの姿がありませんでしたが…」

拓也「いましたよ…（笑）それより、沙耶さんこそ…何故あそこに？」

沙耶「仕事です…」

拓也「どんな？」

沙耶「…私の国は…甲賀の里です。…昔から伝わる忍法を教え込まれて…」

拓也「甲賀というと…確か忍者の里…沙耶さんは…くノ一ですか～～」

沙耶「その言葉…好きではありません！」

拓也「あっ…申し訳ない…でも…忍者が活躍したのは戦国時代…」

沙耶「戦国時代？…確かに先祖は、武将・武田信玄公に使えていました。平穏な世になった今では、定期的に世の流れを知るため江戸に出るのです。今回、私に役目が回って来まして…」

拓也「赤穂に不穏な動きがあるということですか？」

沙耶「拓一郎さん…あなたも？国はどちらですか？」

拓也「はて…武蔵の国になるのかな～～？」

沙耶は、曖昧な言い方に眉を曇らせた。

拓也「いや、記憶にないのですよ～～生まれたところが…」と誤魔化した、未来から来たなど言えたものではない。

沙耶とは、少し離れて寝ている。

夜中、沙耶の苦しそうな息遣いで目を覚ました。

「はぁ…はぁ…」

拓也「沙耶さん…苦しいのですか？」

沙耶「ちょっと、熱が出たようです…」

拓也は、沙耶の額に手を置いてみると火傷するほど熱い。

破傷風？…刀で切られた傷からバイ菌が入ったのだろうか…傷バンに少しは消毒効果があるのだが…。

近くに川があった筈だ…兎に角冷やさなければ…

拓也は、穴の空いていない桶を見つけて、川に水を汲みに行く。

川は、うっすらと氷が張っていた。

戻ってみると、沙耶は「コンッコンッ」と、変な咳をしている。

拓也『風邪？』暖かくて、カロリーの高い物を食べさせてあげたい。

しかし、未来から持ってきて廃屋に隠してある手荷物には携帯食しかない…

一日に必要なカロリーが凝縮された物だ。

拓也『無いよりはましか…金を持ってきていないから…』

沙耶に携帯食を食べさせた。

沙耶「堅いけど…美味しい…何という食べ物？」

拓也「野菜や肉など練り合わせて乾燥させた物だよ。日持ちが良いから持って歩いている。さあ、お休み。」

沙耶「有り難う…」と言って目を瞑った。

拓也『かたじけない…より…有り難うの方が私には響きが良いな…』

暫く、水に浸した手ぬぐいで額を冷やしてあげた。合わせて拓也自身が着ていた着物を掛けてあげる。護身用ボディースーツ一枚になったが我慢した。

いつの間にか眠ったらしい…フト…背中に温かくて柔らかい物が密着しているし、自分の着物も掛かっている。

拓也「さ・沙耶さん…」

沙耶「このままで居ましょう、拓一郎様も凍え死んでしまいます。私はだいぶ楽になりました。」

拓也は、暖かいけど…眠れなくなった…

まんじりともしない一夜が明けた。

沙耶が、そーっと離れていく…ゴソゴソと着物を脱いでいるようだ。

拓也は眠ったふりをして、見ないようにしていた。

沙耶「拓一郎様…起きておられますか？」

拓也「はい……」

沙耶を見ると、昨日昼間見た着物姿に戻っている。

沙耶「ふっ、着物…これが表なのです…背中破れていますが…」

拓也「そうですか～～昨夜のは裏地なんですね…」

沙耶「あるところに、手荷物を隠してあります、取ってきますから…待っていて下さい…」

7

拓也は、沙耶を待ちながら、目的が無くなったので現代に戻ろうかと考えていた。

吉良邸討ち入り事件に、興味があつてタイムスリップしてきたけれど…

現実には、むごい殺戮現場だった…浅野家への忠信による美談と伝えられているが…結果、赤穂浪士は幕府から切腹の刑に処されているのだ。

仇討ち…幕府は奨励していた節もある。

しかし、あくまでも被害者側に対してであつて、加害者が刑を受けたあとの仇討ちはナンセンスである。

いつ頃から、美化されたのか知るよしもない。

考えるに、組織（浅野家）に対し、忠信のための仇討ちと、その原因となった松の廊下事件がすべてと思われる。

真実を知るためには、タイムスリップし、江戸城内に入らなければならない、いくら物体透明化装置があつても、危険極まりない…足音はするし、人の多いところでは人の動きに避けきれず、衝突してしまうと思われる。

また、吉良義央と浅野長矩の心の内までは判らない…何故浅野が吉良を斬りつけたのか…足を運んだってわかるものではない。

自分の存在が騒ぎの素となり、歴史が変わってしまう危険もあるのだ。

松の廊下事件を、止めてはならないのだ。

拓也は、この一連の事件から興味が薄れていくのを感じていた。

平和な時代に育った拓也、あまりにもむごい現場を見てショックを受けていたのである。

拓也は、タイムマシン制作の研究に没頭するうち、世間に対して疎くなっていた。

早い話、世間知らずなのだ。

そんな特異な状況下で沙耶と知り合ったこと、初めて異性を意識した。

まんじりともしない、一夜を思い描いただけでも胸が熱くなる。

これが恋という物だろうか…

どうしたのだろうか、心配になる頃になって沙耶は戻ってきた。

沙耶は、薄い羽織物を着てきた。

拓也「沙耶さん、遅かったですね～～」

沙耶「国に、便りを送ってきました。それと…街は騒然としています。沢山のお役人が右往左往していて…はやく本所から離れた方が良いと思われます。」

拓也「沙耶さんは、どうするのですか？」

沙耶「私の役目は、終わりました。国へ帰ろうが江戸に残ろうが…おなごの私は自由なのです。国へ帰っても…待っている人も居ないので…拓一郎様はどうされるのですか？」

拓也「私も…アテがない…」と、気持ちと裏腹な言葉が出た…現代に戻るのではなかったのかと思ひながら…

沙耶「もしよろしければ…お供してよろしいでしょうか…」

拓也「願ってもないことです。」

8

二人は、本所を後にした。

沙耶は、歩くのが速い…早く本所から離れようという意識もあったのかも知れない。

一・二度、振り返り待たれてしまった。

茶店を見つけて、沙耶が「少し休みましょうか～」

拓也「面目ない…足の裏にまめが出来たようです…それと…金子（きんす）の持ち合わせがない…」

沙耶「あら～…いいわ、私が持っている。」

二人は、お茶を飲みながら…

拓也「沙耶さん…何時も前を歩いていたので…目的地があるのですか？」

沙耶「拓一郎様にアテがないということなので…甲斐の国へ行ってみたいのです。よろしいですか？」

拓也「甲斐…武田信玄の？…」

沙耶「私の先祖は、信玄公に世話になったと伝えられています。ですから…お墓参りをと…」

拓也は、遠いな～～と気分が滅入る…

沙耶「甲州街道に出れば…それと、足を見せて下さい…良い薬を塗って進めます。」

拓也は思い出した…甲賀忍者は薬術に優れていたと…

そして…くノ一は武田信玄の側近で（歩く巫女）として、諜報活動に従事していたとも…薬を塗っていた時、沙耶が突然、咳き込んだ。今まで我慢をしていたように、激しく…

拓也「沙耶さん！どうしました？」

沙耶「だ・ゴホッ…大丈夫です…咳止めの薬を持っています。ゴホッ…」

拓也は心の中で『もしや！』とビックリする。

拓也「沙耶さん、甲斐の国まで無理だ、その身体では。」

沙耶「…」

拓也「この辺で、家を借り養生しよう」

拓也は茶店の主（あるじ）に「おばさん、この辺に借家…ありませんか？」

店主「そうやね～～、一里ほど行ったところに長屋があるですよ～～」

拓也「かたじけない……」

9

拓也は、何としても沙耶を休ませたいと思っているが……

薬を飲んで、落ち着いた沙耶は「大丈夫です……風邪をこじらせているだけですから……」

拓也「風邪は万病の元、治ってからでもけして遅くはない……」

沙耶「でも……」

拓也「私たちは、まだ若い、いくらでも時間はある。」

沙耶は、拓也をジッと見つめて頭をコクリと縦に振った。

市ヶ谷の長屋を見つけた二人。

最低限の家財道具は、大家から借りた。

人の良いおばさんが居て、色々面倒を見てくれる。

拓也は、取りあえず仕事を見つけることにした。しかし拓也に出来る仕事など、そうそうあるわけがない。

ふと気付くと、小さな子供達が沢山居る。

簡単なオモチャを作ってあげたり、字の読み書きを教えることはできる。

力仕事には向かない拓也だから、知識を披露するしかない。

寺子屋はあったものの、まだ数が少ない時期、親たちは願ってもないと飛びついた。

沙耶は温和しくしていればいいものを、チマチマと拓也の手伝いをする。

拓也は、現代で言う中学生くらいまでの内容なら教えることが出来る。

ただ、専門の物理を教えることが出来ないのが残念と思っていた。

親たちが、授業料という名目で食物などを持ってきてくれるのが有り難かった。

ある夜、拓也の布団の中に沙耶が入ってきた。沙耶「拓一郎様……」

拓也はまだ沙耶に指一本触れていない……どぎまぎした。

沙耶「私を愛してくだされないのでですか？……」

拓也も沙耶が好きだ、魅力的だし……ただ、沙耶と関係を持って、未来に影響が出るのではという危惧もある。

煮え切らない拓也に沙耶は積極的だった。

沙耶の柔らかくて暖かな身体に拓也は見境いがなくなった……

朝、寄り添ったままの二人……沙耶は、幸せな表情で眠っている。

拓也は、このままこの時代で暮らしてもいいとさえ思うようになっていた。

沙耶と一緒に……

ある日のこと、沙耶は怠そうで起きられないでいた。

拓也「今日一日、ユックリ寝ているがいい。」

沙耶「そう言うわけには…ゴホッ」

拓也「ほら、ユックリ寝ていること。」とは言ったものの、どうしようか悩んだ。早く医者に診せてやりたいが…

沙耶が夜中にコンッコンッと咳が出て、慌てて起きていき咳止めを飲んでいることは知っていた。

拓也は、ある程度予測できた。沙耶は肺結核ではないかと…

江戸時代では治療法がない…

拓也は決心した。『未来…自分の居た時代に連れて帰ろう』と…

ただ、この場所から帰るには危険が伴う…位置的な問題だ…大通りの真ん中だと即交通事故に遭ってしまうし、コンクリートの壁の中だったら目も当てられない…

一番安全な場所…拓也がタイムスリップしてきた場所に行くことだ。

拓也「沙耶さん、出掛けてくる、温和しく寝ているんだよ。」

拓也は、大家の所に行き（大八車）を借りられないか頼んでみた。

大家「ああ…いいよ～古いのが一台ある。使ってくれ…して…何に使う？」

拓也「ある場所に荷物があって…それを運ぼうかと…」

大八車を引いて戻ってくると…なにやら騒がしい…

世話好きのおばさんが拓也を見つけて…

おばさん「拓一郎さん、どこへ行っていたんだい、大変だよ！沙耶さん血を吐いた！！」

拓也はビックリした。そんなに侵攻していたのかと…

拓也「沙耶！！～～」沙耶の口や枕元は綺麗な赤色に染まっている。これは危惧していた肺結核に間違いのない証拠だ。時は急を要する。

沙耶を布団と一緒に大八車に乗せ走り始めた。

拓也がタイムスリップした場所は巢鴨だ。北に向け走り始めた。

沙耶「拓一郎様…何処へ？」

拓也「沙耶を、医者に診せなければ…」

拓也は必死である…走るうちに草鞋はボロボロになり素足のまま走る…治りかけている足の裏の豆は再び剥け出血するが、必死に大八車を引く拓也。

沙耶「拓一郎様…私は大丈夫です…歩きますから…」

拓也「駄目だ！！」

拓也『高度医療を受けさせれば治る可能性がある。未来…未来しかない。』とブツブツ独り言を喋りながら…痛みによる意識も遠のき始めた時、見覚えのある道に出た。

お地蔵さんが、あの時のままの笑顔を見せている、それを見て拓也は気絶した。

沙耶「拓一郎様…大丈夫ですか？」と言う問いかけで、拓也は気付く。

拓也「ううう…」拓也の足は血だらけだ…そして足の筋肉が痙攣している…

沙耶「無理をなさって〜〜〜」と涙をこぼしている。

拓也「沙耶、立てるか？これからある場所に行く。私の故郷だ。」自分でも立ち上がるのがやっとなのに…

沙耶「故郷…？ここは武蔵の国ですが…」

拓也「違うのだよ沙耶…私は遠い未来から来た。」

沙耶「み・ら・い？」

拓也は、徐にマシーンを懐から取り出す。

拓也「沙耶…愛してる…初めて逢った時、取り返してくれたもの…これが未来と行き来できるものなんだ。」

沙耶「それ…印籠ではなかったのですか〜」

拓也は、誤作動防止解除パスワードを入力した。

拓也は沙耶を立たせる…「良いかい？これから行くところは沙耶をビックリさせるかも知れない…」

沙耶「…………拓一郎様と一緒に…何処へでも行きます…」

拓也「沙耶…私の本名は、吉村拓也と言う…この時代にあった名前を使っていた。」

沙耶「拓也…様？…」

拓也「そう…では…行くよ！」と沙耶を思い切り抱きしめ、スイッチを押す。

=====

懐かしい、拓也の研究室。沙耶は目を丸くして見回している。

片隅にあるベッドに沙耶を誘導し横にならせる。

沙耶「わ〜〜っ、柔らかなお布団…」

拓也「これから…病院に連れて行くからね、その前に着物と髪を結っているものを外すよ」拓也は自分のトレーナーを出してきた。

下着は仕方がない…

沙耶の着物を脱がせてトレーナーを着せた後…自分の足の治療をする。

沙耶「拓也様…ここは？」

拓也「僕の部屋。家族は誰もいない…これから救急車を呼ぶ。何も心配しないで良いからね、私が何時も側にいるから…」

沙耶「拓也様〜…願わくば…もう一度…私を抱いて下さい…」と目には、うっすらと涙をためながら…

拓也は、その言葉が気になった。そっと抱きしめてあげる。

.....

普段、やかましいと感じていた音が、今はすぎるような気持ちで待つ。

通報時、予測した病名を告げたためかどうか知らないが、救急隊員達は完全武装で入ってきた。

沙耶は、身構える。

拓也「沙耶！大丈夫だ！心配ない……」

沙耶が運び込まれたのは、病院の隔離病棟である。

レントゲンや血液検査。

受けるたび抵抗する沙耶、拓也が側で手を握っていてあげないと、温和しく受けてくれない。

それはそうである、沙耶にしてみれば、見たこともない機械がいっぱいあるし、注射針は初めての経験であろう。

拓也が身体と手を押さえていなければならなかった。

担当医や看護師の手を煩わせた。

結果……相当侵攻している結核と診断された。

エピローグ

拓也は医師に詳しい話を聞くために、病室を出る。

医師「なんで、もっと早く連れてこなかったのですか……」

拓也「連れてこれない事情がありまして……」

医師「余命……3ヶ月……もっと早いかもしれない……」

拓也「えっ……」

医師「努力はしてみますが……肺の半分は摘出しても……同じかも知れない……」

拓也「先生……運命のまま……連れて帰ります……」

医師「そうですか……仕方がないですね……ここにいても同じです。」

拓也は、胸が張り裂けそう……『沙耶が死ぬなんて……嫌だ~~~~~！！（泣）』

病室に戻ってくる拓也……涙を見せないように……

沙耶「ここのお布団……堅いのね~~拓也様……帰りたい……あの柔らかなお布団が良い……」

拓也「そうだね……帰ろう……沙耶……」

拓也の研究室に帰ってきた二人……

沙耶を拓也のベッドに寝かせ……大量にある書物と格闘する拓也。

沙耶を救うため、医学書を熟読する。

物理学に少し共通点があるはずと……

沙耶が段々激しい咳をするようになってくる。

拓也『もう少しだ……もう少しで完成する……』

薬が完成した……

ふと、沙耶の様子が変だ……

沙耶「……………」

拓也「沙耶！薬が完成したぞ！沙耶！沙耶〜〜〜〜ッ」

呼吸のしなくなった沙耶の口に薬を流し込むが…

遅かった〜〜

沙耶は死ぬ運命だったのか…

未来に連れてきた影響…歴史が変わる？

庶民…それも死ぬ運命の人間を未来に連れてきても、影響はないのだ…死ぬ場所が変わるだけなのだから…

まだ暖かな沙耶に添い寝し、涙を流す拓也…

拓也は沙耶を抱きながら…「そんな〜〜置いて逝かないでくれ〜〜」

突然、胸の中から逆流するものが…

「ゲホッ」手には、真っ赤な鮮血…

拓也『そ・そうか…沙耶の側に行ける…』

抱き合った二つの物体が、何時までもベッドに横たわっていた。

<完>